

第 8 回 日本異端・カルト対策キリスト者協議会 春集会のご案内

●日時 2017 年 6 月 16 日(金) 10:00—16:00

●会場 日本イエス・キリスト教団 京都聖徒教会 (牧師 船田献一師)

〒603-8143 京都市北区小山上総町 50-1 ☎075-451-2363 京都地下鉄 烏丸線 北大路 6 出口

●主題 「レストレーション運動の分析と評価」

日本異端・カルト対策キリスト者協議会では、外部講師をお招きし研鑽を積んでまいりました。「なぜ、極端な傾向に流れていくのか」は、異端・カルト対策に関わる者にとっては解明しなければならない課題です。今回、安黒務先生に「レストレーション運動の分析と評価」と題して「極端な傾向に流れていく危険」について語っていただきます。先生からは、「レストレーション運動＝異端ではないが、異端へシフトしていく危険は内包している」と助言をいただきました。むずかしい分野で、正確な知識と分析力が必要と感じます。先生の主題講演は「レストレーション運動」に限定せず、他の事例も触れていただくことになっております。異端・カルト対策の現場で格闘されている先生方と共に、分析・評価の仕方、神学的な系譜、危険な兆候など、今後の手助けとなる学びができれば、さいわいです。

●講師 安黒務先生

・プロフィール 関西学院大学、関西聖書学院、東京キリスト教学園 共立基督教研究所専門研修課程(宣教学)修了。日本福音教会正教師。エリクソン博士と同じスウェーデン・バプテストの流れをルーツとする日本福音教会(JEC)の西宮福音教会・岬福音教会・堺福音教会東京チャペル・関西聖書学院講師等の奉仕を経て、現在一宮チャペル牧師、生駒聖書学院講師、2004年春より、日本福音主義神学会西部部会理事。『福音主義神学』編集委員等を務めるかたわら、インターネットをとおしての継続神学教育機関である「一宮基督教研究所」を主宰。

・著作に、「J.D.G.ダンの“イエスと御霊”に関する一考察」、「キリスト教会の源流と歴史的遺産-シカゴ・コールへのひとつのレスポンス」、「日本の宗教土壌を改良する“モーセの十戒”」、「殉教と背教のはざ間にうめく“主の祈り”」、「“使徒信条”に沿って学ぶ-エリクソン著“キリスト教神学”」、「日の丸・君が代・天皇制問題を切開する“ローザンヌ誓約”」、「宗教的・カリスマ的経験の座標軸」、「福音主義イスラエル論: 神学的・社会学的考察」(Amazon Services International)。「霊の戦い: その聖書的・包括的理解に関するナイロビ声明」(誰もが知りた いローザンヌ宣教シリーズ No.61 ブックレット)。

・翻訳書に、ミラード・J・エリクソン著『キリスト教神学』(第一巻、第二巻)。ジョージ・E・ラッド著『終末論』。

●プログラム

10:00-10:15(15分) 奨励、祈禱、讃美、オリエンテーション

10:15-11:15(60分) 講演Ⅰ 講師 安黒務先生

11:15-11:45(45分) 質疑応答

11:45-12:45(60分) 食事 (自由ですが、後半に、自己紹介、懇談の時間を持ちます)

12:45-13:45(60分) 講演Ⅱ 講師 安黒務先生

13:45-14:15(30分) 質疑応答

14:15-14:30(15分) 休憩

14:30-15:45(75分) 「異端・カルト集団の最新情報」

①キリスト教会のカルト化の現状

②韓国異端(統一協会、摂理、新天地、神様の教会、グッドニュース宣教会 中央万民教会、タラッパン、その他)

③エホバの証人

④モルモン教

⑤その他

(※ 参加の先生方に発表を依頼しますので、よろしくお願いいたします)

15:45-16:00(15分) 次回 2017 年秋集会予定(以下は役員試案です。他の案も検討し決定します)

●日時 9/22(金) 9/29(金) 10/20(金) 10/27(金)

●会場 お茶の水クリスチャンセンター

●主題 「異端・カルト集団の最新情報」(仮題)

他 「教会健康度チェック」の評価、韓国異端の最新情報など。祈禱、感謝、散会

●申込み

1, 事前に参加確認をメールでお願いします。紹介者も事前にお名前、所属をお知らせください。当日飛び込みの参加は不可。

2, 費用 参加費 ¥2,000 会員は年会費 ¥1,000

3, 確認事項 ①名前 ②所属

4, 申込み 問い合わせ 代表: 小岩裕一(yuikoi@gmail.com) ☎ 090-9697-1338

日本イエス・キリスト教団横浜栄光教会牧師

以上

## 1. 挨拶・招きへの感謝

1. 簡単な自己紹介—JEC 日本福音教会・一宮チャペル牧師の安黒務、インターネット上で「一宮基督教研究所」という継続神学教育の働き
  2. <http://www.aguro.jp/>, FaceBook, YouTube
  3. tsutomuaguro@gmail.com
2. 昨年末、小岩先生より、案内にあるような内容—「レストレーション運動の分析と評価」というテーマで講演依頼のお電話を受けました。
1. さて、今回のテーマでいう「レストレーション運動とは」一体どのような運動をいうのでしょうか
  2. レストレーションとは、「回復」という意味です。
3. キリスト教会には、「回復」を目指す運動は多々あります。
1. そのような中で、今回は「レストレーション運動」を以下のように定義して、このテーマを扱いたいと思います。

## 4. What ?—【レストレーション運動の定義】

5. 20世紀初期からの古典的ペンテコステ主義に代わる、中期からのペンテコステ派の中のレストレーション運動(伝統的プロテスタント諸教派内におけるカリスマ運動とは異なる)
1. 古典的ペンテコステ主義は、“Oneness”ペンテコステ運動における分裂騒ぎもあり、
  2. 福音主義的信仰へシフト、神学的な安定に入るとともに、熱狂主義は抑制され、それは次第に醒めていった。
  3. このシフトに反発し、Cold Pentecostalism に対し、Hot Pentecostalism の回復”Restoration”、熱狂主義の回復を求めた、また求め続けている運動である。
  4. その中には、同じ傾向を宿す多種多様な運動や教えを包摂しつつ、さらなる展開を続けており、その全体像を把握することはとても困難である。
  5. 今回は、主として、Alan Anderson, *An Introduction to Pentecostalism – Global Charismatic Christianity* (2004, 2014), Cambridge を資料源として、「レストレーション運動」の輪郭と本質の把握に尽力している。

## 6. How ? —そして、「分析と評価」の基準

を、「ローザンヌ誓約・第二項 聖書の権威と力」とシカゴ・コール「序」「歴史的ルーツと連続性への呼びかけ」におきたいと思います。

## 7. 【「ローザンヌ誓約・第二項 聖書の権威と力」と注釈】

1. 「私たちは、旧・新両約聖書全体が、神の靈感による、真実で、権威ある唯一の書き記された神のことばであり、それが確証するすべてにおいて誤りがなく、信仰と実践の唯一の無謬の規範であることを確認する。…
2. 聖書の使信は人類全体にむけて語られているものである。キリストと聖書による神の啓示は変ることがない。それを通して聖霊は今なお語っておられる。
3. 聖霊はご自身の真理をそれぞれ自分の目をもって新鮮に理解させるために、あらゆる文化の中にある神の民たちの心を照明し、そのようにして神の多種多様な知恵を全教会に明らかにするのである。」
4. 他方、この「聖書の使信」の不可変性は、死せる、無表情の、無味乾燥な画一性のことではない。
5. 聖霊はみことばの記者たちの個性と文化を用い、その一人一人を通して事柄を新鮮かつ適切に伝達されたように、
6. 今日においても『ご自身の真理をそれぞれ自分の目をもって新鮮に理解させるために、
7. あらゆる文化の中にある神の民たちの心を照明する』。
8. 私たちの心の目を開かれるのは、この御霊ご自身であり、…すべてが、その恵みの対象なのである。聖霊が聖書を通して『神の多種多様な知恵』を明らかにされるのは、まさにこの『人類という壮大ないりくんだモザイク』（ドナルド・マクギャブランの言葉）に対してである。
9. このように『全教会』は、神の啓示全体を、そのすべての美しさと豊かさとともに受け取ることを求められるのである。※

## 8. 【シカゴ・コール「序」「歴史的ルーツと連続性への呼びかけ】

1. 前文  
「いつの時代でも、聖霊は教会に対し、聖書による神の啓示に忠実であるかどうかの精査を命じられる。われわれは、教会における福音主義の復興をとおして神の祝福が与えられていることを感謝している。しかしながらそのような成長期にこそ、またわれわれの弱点について一層敏感であることが必要である。現代の福音派は、歴史的キリスト教信仰を縮小変形させているために、自らの十分な成熟の達成を妨げられている。」
2. <歴史的ルーツと連続性への呼びかけ>
3. 「われわれは、聖書と聖霊さえあれば過去とは無関係であると性急に思い込むことによって、われわれのキリスト教的遺産の豊かさをしばしば見失ってきたことを告白する。

4. その結果、われわれは神学的に皮相なものとなり、霊的には虚弱となり、他の者たちの間でなされている神のみわざには盲目となり、われわれをとりまく文化と安易に結託してしまった。」
  5. これがために、われわれのキリスト教的遺産の回復を要請する。教会の歴史において、キリスト教の絶大な救いの恵みを宣べ伝え、聖書に従って教会を改革しようとする福音主義的な衝動が絶えず存在していた。
  6. この衝動は、公教会的な諸会議が明らかにした教理、古代教父たちの敬虔、アウグスティヌスの恩恵の神学、修道院改革者たちの熱心、実践神秘主義者たちの献身、クリスチャン人文学者たちの学問的な誠実さの中に表れた。
  7. さらに、プロテスタント宗教改革者たちの聖書への忠誠と宗教改革急進派の倫理的熱心の中で花を咲かせ、宗教改革を完成させようとしたピューリタンと敬虔主義者たちの努力のうちに引き継がれた。
  8. それはまた、18, 9世紀の信仰覚醒運動の中に表された。これらの覚醒運動はルター派、改革派、ウェスレー派およびその他の福音的諸派を、教会の刷新と、福音の告知と社会实践による宣教の拡大、という全教会的なわざにおいて一致団結せしめた。
  9. この衝動は、キリスト教史のどの時点においても、福音が聖霊の働きによって説き明かされるときにはいつでも存在していた。
  10. たとえば、ギリシャ正教会とローマ・カトリシズムの中にも、またわれわれと異なる形態をとるプロテスタント諸派内部における聖書的洞察のあるものの中にも存在している。
  11. われわれは聖書が示している福音の枠を越えようとは思っていない。
  12. しかし、われわれは、福音の全体的意味に関して、他の時代や、他のもろもろの運動から学び取る必要を認識しないでは、十全な意味で福音主義的であるということとはできない。
9. 牧田吉和師のコメント「論敵の問題提示とその真理契機を認識し、自らの神学構造の中にそれを正しく位置づけ、真の神学的解決を示すことこそが、自らの神学をも成熟させ、結果的に最も強力な弁証力をも発揮する」

## 10. 【分析・評価の実際】

11. この福音主義神学にシフトした Cold Pentecostalism に対して、Hot Pentecostalism の回復を目指した、今もなお目指している「レストレーション運動」を、「ローザンヌ誓約・第二項 聖書の権威と力とその注釈」と「シカゴ・コール「序」 「歴史的ルーツと連続性への呼びかけ」をもって分析・評価していくとはどういうことでしょうか。

12. そのひとつは、わたしたちの「**信仰と実践の唯一の無謬の規範**」は、聖書であるということであり、「**いつの時代でも、聖霊は教会に対し、聖書による神の啓示に忠実であるかどうかの精査を命じられ**」ているから、それに従い、分析・評価していくということです。
  
13. 「**聖書をもって分析・評価していく**」とはどういうことでしょうか。
  1. それは、聖書神学、歴史神学、組織神学、実践神学のすべてを動員して、聖書的な視点から分析・評価していくということです。これは、簡単なことではありません。
  2. 難病を診断する医師が、その医学知識のすべてを動員して、さらに「病人を診断する」最先端の機器を活用し、分析・評価するのに似ています。
  3. レントゲンだけでなく、CT スキャンや MRI のような役割を果たす (XP・・・単純 X 線撮影→骨折や肺などの診断、CT・・・X 線断層写真、体を輪切りに撮影します。→大きい腫瘍など。MRI・・・核磁気共鳴画像、磁気に反応する造影剤を、体に入れて細胞ごとに診断します。→ガンなどの確定診断や治療方法の検討や転移などの診断)
  4. 異端やカルトの専門家でおられる皆さんもそうですが、わたしは、このような高度なレベルの神学的分析と評価の実例を数多くの優れた神学者の中から教えられてきました。
  5. 聖書神学の領域では、G. E. ラッド。歴史神学の領域では宇田進。組織神学の領域では M. J. エリクソン、牧田吉和。というようにです。
  
14. さて、まず「**レストレーション運動の教えの特徴**」をみてまいりましょう。
  1. その「福音理解の特徴」は、**大変簡略化された福音理解のフレームワーク**にあります。
  2. (1) **フル・ゴスペル…義認** (改革派の伝統から)、**聖化** (ホーリネス的ペンテコステ) (ウェスレアンの伝統から)、**癒し** (I ペテロ 2:24 の字義的解釈、A. J. ゴードンや A. B. シンプソンから)、**再臨** (通常、千年王国前再臨説) (J. N. ダービーから)、**聖霊のバプテスマ** (通常、異言を語ることによって明らかにされる) —輪郭のみであり、**精細に掘り下げられていない**印象。福音理解の聖書的掘り下げが不十分、その**福音理解の希薄化**は、いとも簡単に**非聖書的な哲学や宗教、価値観・世界観とのシンクレティズムに陥る脆弱性**をもっている。聖書性、公同性、今日性、学問性四つの要素のバランスのとれた福音理解において成長していく必要。
  3. (2) **後の雨** (申命記 11:10-15: 前の雨—乾燥した夏を経て、種まきの前に土を柔らかくする **10月の雨**、後の雨—収穫前に実りを与える **四月の雨**) …今、救

いの歴史の最高潮の時代と見られる、“失われていた”御霊の力の回復を信じる歴史（神の配剤・摂理）哲学。キリスト教の歴史における聖霊の働きに対して一面的。二千年間の教会の歴史からの霊的・神学的遺産への評価の欠如。シカゴ・コールで指摘されているポイント。

4. (3) 使徒的信仰…:使徒的教理（フル・ゴスペル）の回復の運動としてのペンテコステ主義をより先鋭にした見方、**使徒的力**:御霊の賜物と’しるしと不思議’、**使徒的権威**:使徒、預言者、伝道者、牧師、教師の’奉仕の賜物’、**使徒的实践**:使徒行伝の書における教会のモデルを基盤とした新約聖書の教会を回復させること。—超自然的な賜物の強調、使徒職・預言者職の強調は、聖書解釈の権威の問題、**聖書の啓示を超えた啓示の問題**が生起する。
5. (4) ペンテコステ…二重の意義—①ディスペンセーション主義側面:ペンテコステ的経験は**新時代の開始**としてみられる。②霊的側面:ペンテコステは信仰者の経験において繰り返されるべき出来事であり**ライフ・スタイル**である。とらえ方、考え方が一面的であり、包括的な福音理解において課題がある。聖霊の超自然的働きに**焦点**があたり、それらを包摂する**神学的枠組みが脆弱**。(D. Williams Faupel, “The Everlasting Gospel - The Significance of Eschatology in the Development of Pentecostal Thought” , p.27-43, deo)

## 15. 【レストレーション運動の特徴(大枠)の中の、個別の問題】

16. 第一点は、「(1)フルゴベル」の中の理解より—【再臨（通常、千年王国前再臨説）（J.N. ダービーから）】特に『ディスペンセーション主義聖書解釈と、そこから派生しているキリスト教シオニズム』問題について、これはトム・ヘス著『ダビデの幕屋』にもあるが、今日の「祈りの塔」「ダビデの幕屋」運動とつながりがある。わたしは、この運動と教えが、この十年前くらいからわたしの所属団体と母校に流入してきたので、その分析と評価を試み、その問題点の**治療の処方箋**としてラッド著『終末論』を翻訳し、安黒務著『福音主義イスラエル論』を執筆し、その治療に努めてきた。
17. 第二点は、「(2)後の雨」の理解より、キリスト教の歴史における聖霊の働きに対して一面的。二千年間の教会の歴史からの**霊的・神学的遺産への評価の欠如問題の治療の処方箋**として、宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』の学びを活用して、所属団体のルーツとアイデンティティの輪郭と本質を執筆した安黒務著『キリスト教会の源流と歴史的遺産—シカゴ・コールへのひとつのレスポンスとして』アマゾン書店がある。また、宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』をテキストにした一年間のビデオ講義録がある。

18. 第三点は、「(3)使徒的信仰」より、超自然的な賜物の強調、使徒職・預言者職の強調は、聖書解釈の権威の問題、**聖書の啓示を超えた啓示の問題**が生起する。**聖書論、啓示論、靈感論、照明論の有機的一体的理解のすぐれた論文として牧田吉和師の「パーフィンの聖書論」**があり、それを後に引用する。旧新約聖書における啓示の中心的出来事としての「キリストの受肉と死・葬り・復活、そして昇天・着座・聖霊の注ぎ」の歴史の一回性の出来事とその啓示の文書化としての聖書、そしてその一回性に根差した連続性としての「あらゆる文化の中にある神の民たちの心を照明し、そのようにして神の多種多様な知恵を全教会に明らかにする」聖霊の照明の働きの領域を探求し続ける必要がある。
1. 「この衝動は、キリスト教史のどの時点においても、福音が聖霊の働きによって説き明かされるときにはいつでも存在していた。たとえば、ギリシャ正教会とローマ・カトリシズムの中にも、またわれわれと異なる形態をとるプロテスタント諸派内部における聖書的洞察のあるものの中にも存在している。【つまりレストレーションの諸運動の中にも】、われわれは聖書が示している福音の枠を越えようとは思っていない。
  2. しかし、われわれは、福音の全体的意味に関して、他の時代や、【レストレーションの諸運動をも含めて】他のもろもろの運動から学び取る必要を認識しないでは、十全な意味で福音主義的であるということはできない。
  3. ただ、繰り返して指摘しているように、啓示論、聖書論、照明論において、依然として重大な問題を内包しているように見える。
19. 第四点は、ペンテコステ的より、聖霊の超自然的働きに焦点があたり、それらを包摂する神学的枠組みが脆弱。

## 20. レストレーション運動関連領域の事例研究・考察等

21. M. J. Erickson, "Christian Theology" 3<sup>rd</sup> Edition とその要約版、エリクソン著、安黒務訳『キリスト教教理入門』第三版(近刊予定)の「第30章 聖霊に関する近年の諸問題」で、①**聖霊と今日における預言**、②**聖霊と世界の諸宗教**、③**聖霊と他の諸霊**の問題を取り扱っている。
22. わたしの団体でも、預言運動への傾斜は見聞きするようになった。わたし個人は、学生時代に、KGK との交わりの中で導かれ、養われ、成長してきた経緯があり「三つ子の魂、百まで」という感じで、ラッド、宇田進、エリクソン等の福音主義的なセンターラインを歩むことが一番しっくりいっているのだが、わたしたちの団体のある人たちはレストレーション的な傾向(祈りの塔、**ダビデの幕屋**、**キリスト教シオニズム**、**ディスペンセーション主義終末論**、**霊の戦い**、**預言運動等**)に親近感を覚え、徐々にそちらにシフトしていっているのではないかと懸念している。



23. 預言運動への関わりにおいて、基本的には「伝統的教派内におけるカリスマ運動」としての位置づけにある JEC は、ウェイン・グルーデムあたりの「照明論」を軸にした立場にとどまるべきだと思っている。キリストの啓示の中心性、聖書の啓示の中心性とその啓示の本質からの逸脱した預言運動になっていくと、グレイゾーン、レッドゾーンへとシフトしていくこととなり、将来的に「異端」視される危険が増し加わることになるのではないかと懸念している。
24. ①**聖霊と今日における預言に関連し、預言運動の事例研究**としては、
1. 聖書解釈における直観的解釈法
  2. 使徒行伝 2:38「イエスの名によるバプテスマ」とマタイ 28:19「父、子、聖霊の名において」を、三位一体=イエスと、**直観的解釈**。次第にシフトし、ある人たちはユニテリアンの傾向を帯びていく。(Robert M. Anderson, “*Vision of the Disinherited – The Making of American Pentecostalism*”, p.176-194, Hendrickson)
  3. **アリスター・マグラス著『キリスト教の将来と福音主義』**より
    1. みことばを中心とする福音派は、**聖霊への強調が個人に対する直接の啓示を優先させて、聖書を飛び越えて進む結果になりはしないか、**という懸念をしばしば表明する。
    2. この懸念には十分な根拠がある。
  4. **ケネス・コーブランド(繁栄の神学の唱道者)**は幻の中で、キリストが彼に次のように語るのを聞いた。
    1. 「わたしは自分が神だとは主張しなかった。神とともに歩み、神は私のうちにおられたと主張しただけである。ハレルヤ、これはあなたがたが、今していることである。」
  5. この策略に注目せよ。**キリストの独自性は否定されている。キリストは神ではなく、神に近く歩んだにすぎない。**
    1. みことばに土台を置く福音派は当然、こうした展開に警戒心を抱き、**唯一の解決策は、聖書の集合的権威に立ち返ることである。**
    2. それこそ、神から独特で重大な啓示を受けていると主張する人々の姿勢を、根底からくつがえすものである。
    3. 神が権威をもって語る必要のあることはすべて、これまでに権威をもって語られており、聖書の中で教会に委託されているのである。
25. **福音理解の「認識論的パッケージ」を粉碎してしまう経験への強調。**
1. 福音理解の「多国籍領域における、絶え間なく繰り返される文化的充当、再パッケージ、再種まきに従属。

2. 遺伝子組み換え食物のように、福音理解の本質的要素までもが「変質過程」に入ってしまう危険があるのではないか
3. 簡潔なキリスト教用語と儀式を散りばめつつ、その内容・実質は肉的なものとなり、キリスト教用語を用いて「肉の宗教」を宣べ伝えるということにならないのかと懸念している。(繁栄の神学等)
4. これは、世界的かつ地方的な特徴であり、ペンテコステ主義は単数形でも複数形でも呼びうる
5. あまり遠くない将来に関し、カリスマ的キリスト教のバイタリティは当分継続すると見てよい。(Alan Anderson, *An Introduction to Pentecostalism – Global Charismatic Christianity* (2004) p,61, Cambridge. Havey Cox, *Fire from Heaven – The Rise of the Pentecostal Spirituality and the Reshaping of Religion in the 21st Century* (1995) p,58, 68-71,, Da Capo Press)

26. ②**聖霊と世界の諸宗教との関連の事例研究—『韓国キリスト教神学思想史』**

柳東植著より, p389-392

1. 母性的、シャーマニズム的キリスト教の課題
  1. 疎外され病める民衆の心霊をいたわり、力を与え、治癒する母性的な聖霊運動
2. **霊の平安**…聖霊を受け、異言を通し、抑圧された民衆の”恨(ハン)”をはらす神秘的な言語により、心の平安と霊の健康を回復。
3. **万事了通の祝福**…この世で行うことのすべてで恵まれる。積極的な思考方法、すでに成就されているとの信念とビジョンの中に生きる。
4. **肉体の健康**…肉体の病の原因は罪、罪の原因はサタンの支配。キリストはサタンを打破された。したがってわたしたちの病は癒される。御霊の力による病の治癒。
5. このような三拍子の祝福は、聖霊の洗礼と聖霊の力を受けることによる。
  1. 聖霊の経験は個人的、具体的なもの
  2. 具体的な生の価値に向って自信をもって歩む
  3. 共同体の中に温かみ
  4. 自己の正体を回復し、共同体意識を回復
6. このような母性的聖霊運動は、疎外された民衆に対して重要な牧会的役割を果たす
7. しかし、キリスト教の本質として視点から反省するとき、
  1. 端的にいて、三位一体の神がない聖霊運動になってしまう問題点がある

2. つまり、創造し、歴史を摂理し、人格を回復し、裁かれる神のない聖霊は、
3. 結局シャーマニズム的な呪力に転落する危険性がある。
8. このような聖霊の力が生存の価値と結びついて現世ご利益を追求する時、
  1. これは結局、シャーマニズム的な構造を脱皮することができないのではないか。
  2. ここに母性的な聖霊運動がもつ長所と限界点があると思われる。

27. **③聖霊と他の”諸霊”との関係の事例研究**では、特にその「アニミズム的世界観」と「聖書的世界観」の兼ね合いをどうみるのか

1. 聖書的世界観とはいかなる世界観なのかの再検討、合理主義の時代における機械的世界観とプレ・モダンそしてポストモダン時代におけるアニミズム的ないしニューエイジ時代の世界観の問題
2. 『霊の戦いに関する聖書の包括的理解のためのナイロビ声明』安黒務訳、参照
3. 共通の基盤
4. 神学的言明
5. 実践における霊の戦い
6. 注意事項
7. 意見に相違のある諸領域…教えや実践に関する**聖書の保証**について
8. 継続的研究を必要とする未研究領域

28. **聖書論、啓示論、靈感論、照明論の有機的一体的理解のすぐれた論文として牧田吉和師の「パーフィンの聖書論」**

1. 問題の核心として、位置づけられる事柄、最も重要な要素として、課題として、また今日盛んになりつつある問題として—エリクソンも指摘しているように「預言運動」があげられる。
2. この問題は、聖霊の「啓示—聖書—照明」の文脈の中にあり、またそれは「神学の座標軸」、その応用としての「使徒的聖書解釈と使徒的実践の座標軸」の中心に位置する課題である。
3. この課題の輪郭と本質をコンパクトに取り扱っているものとして、牧田吉和論稿「H. パーフィンの聖書論」があげられる
4. その構成と内容のポイントは以下の通りである…拾い読みの取り上げ、**思索の基本確立の一助**としていただければ幸いである。

29. **啓示と聖書…「啓示の中心的事実、すなわち受肉は聖書へと導く」** 基本命題

1. 啓示の中心としての**受肉の意義**

2. 単なる真理の伝達という啓示の非歴史的静的理解から、**キリストの受肉**に集中化し、中心化する啓示の歴史的・動的理解へ
3. 特別啓示の中心としてのキリストの受肉の事実—**創造は受肉の前提**をなし、**準備の役割**を果たし、**受肉は再創造の基点**としての意味をもつ。

### 30. 受肉から聖書への移行

1. キリストの受肉は啓示の中心ではあるが、啓示の目的ではない。
  2. **聖書は、キリストの受肉から流れ出てくるのであり、ある意味で受肉の継続**なのである。
  3. 聖書は**道**なのであり、その道に沿ってキリストは、**ご自身の教会に住み込まれる**のである。
  4. **神の全き居住**、この住み込みにおいて、聖書は自らの目的をもつのであり、
  5. 聖書もすべての啓示と同じように、**暫定的行為**なのである。
  6. 受肉において**客観的で全き成就に到達した特別啓示**はそこからさらに歴史の中で働き内在化され、**主観的局面で全き現実化に到達**しなければならない。
  7. この**客観的なしかし過去の特別啓示**が、**客観的かつ現在の担われる形態**が「聖書」なのである。
31. そのような意味において、聖書は**ある意味で「受肉の継続」ともいえる**のである。
1. 御子の時代は、**聖霊のために場所を作る**のである。
  2. 客観的啓示は、**主観的受領へと移行する**のである。
  3. 救済史的視点では、「**聖書**」は「**聖霊の時代**」に属し、
  4. 「御子の時代」において**完結した客観的特別啓示**を文書として保持し、
  5. 「**聖霊の時代**」にあつて**客観的啓示の「主観的受領」**に仕え、**終末的目的地まで歩み続ける**のである。
  6. 聖書の救済理解は、単に**知性の領域**への働きにとどまらず**生の全領域にまで及ぶ救済**である。
  7. 単に教理の伝達にとどまらず、「**生活**」にまで**徹底化する**のである。
32. 啓示と聖書の関係における**二つの克服すべき立場**
1. 機械的靈感主義と単に啓示の人間の記録とした自由主義神学
  2. 啓示と聖書の**極端な分離**の中に、**熱狂主義的なアナバプティスト的スピリチュアリズム**の方向をも見出している
  3. 歴史的には、**モンタヌス運動にもみられる「熱狂主義」と、そこにみられる聖書から離れた啓示の問題**
  4. この傾向は、**熱狂主義的なレストレーション運動の中にもみられる**
  5. 聖書とともに**全啓示が倒れ、キリストの人格もまた倒れる**という事実。

### 33. 聖霊の時代における聖書

1. 聖霊と内的証明…第一に、聖書と聖霊との関係理解を健全な神学的軌道の上に据え直す
2. 聖書は靈感されただけではなく、今も靈感されているのである。
3. 灵感行為は、あくまで聖霊の有機的働きの「一つ」なのであって、聖霊のより包括的な働きの枠の中でこの灵感行為の働きをも理解され位置づけられねばならない。
4. より決定的に重大なのは、この「手段」を通しての聖霊のこれからの働きなのである。
5. 聖霊は、聖書の中で、「キリストの力ある証人」であり続け、聖書において神の言葉を語り続ける。

### 34. 「灵感」と「内的照明」との有機的内的連関性の主張である。

1. 「灵感」は孤立した聖霊の行為ではなく、「内的照明」との本質的連関性の中で生起している。
2. 「灵感」と「内的照明」の有機的内的連関性の自覚は、聖書への我々の態度に決定的な影響を及ぼす。
3. この自覚は、単なる知的理解、教理の知的認識にとどまらず、聖書が生活において今、ここで、具体化されることを要求する。
4. この自覚は、灵感された聖書の真理の、信仰と生活の全領域における信仰的受領を目指し、聖霊の導きを求めつつ、日々聖書に向かわねばならないことを教える。

### 35. 第一に、「聖書」と「信仰と生活」の生きた関係の回復である。

1. 聖霊と内的照明…第二に、我々の目を絶えず聖書の内容に固着せしめる。
2. 聖書の内容は、イエス・キリストへと収束する啓示的真理である。
3. キリストに有機的に結びつけられた啓示的真理の全体性がその対象となる。
4. 聖書への信仰は、キリストへの信仰と一つのことなのである。
5. 聖書と教会と聖霊…第三に、聖書と教会の不可分離的關係を明らかにする。
6. 聖霊は、聖書を用いて教会を導き、教会を建て上げる。
7. 聖書の終末論的位置…第四に、終末的パースペクティブにおいて聖書を見つめさせる。

### 36. キリストのしもべ形態、聖書のしもべ形態、聖霊のしもべ形態—聖霊論的視点からの聖書の捉え直し

1. **受肉**（キリストのしもべ形態）と**聖書の文書化**（聖書のしもべ形態）の類比論
  2. キリストのしもべ形態に代わって**聖霊のしもべ形態**について語られる。
  3. キリストの受肉と聖書の類比論の利点—キリストと聖書の密接な関係
  4. つまり、**キリスト論的視点からの聖書の把握**の堅持
  5. 救済史的展開の観点からは、**聖書は「聖霊の時代」に属する**
  6. キリスト論的視点に偏って聖書を捉えることは神学的に不十分
37. **聖書を聖霊論的視点からとらえ直す必要**
1. 聖書は「聖霊の時代」において、キリストの昇天と着座の後で、
  2. **キリストにおいて成し遂げられた救済の業を歴史の中で適用し**
  3. **現実化するための手段としての役割を担う**
  4. もうひとり助け主としての聖霊自身が、キリストにおいて成し遂げられた救済のわざを
  5. **歴史の中で遂行するために、**
  6. **聖書を成立せしめた。**
38. 聖書は聖霊の産物であるが、
1. **キリストのみわざを歴史の中で現実化するという聖霊のわざの目的論的視点から**いえば
  2. 聖書の成立は**聖霊本来の働きの作業の前提**であり、
  3. 聖霊自身がその作業の前提にかかわった。
39. 聖霊論において問題なのは、
1. キリストの受肉の場合のように「人性」の摂取ではない
  2. **問題になるのは「人格」である。**
  3. つまり、聖霊は**具体的時間・空間における特定の、具体的で固有な人格**である。
  4. わたしやあなた、**相互に固有な差別性を有するあなた方の中に注ぎ込まれる。**
  5. それらが前提にされて、聖霊はそこに注ぎ込まれる。
  6. そこでは、聖霊の働きは「**神律的相互性**」における働きをなす。
  7. つまり、聖霊の働きにおいては、**神の支配と主権性が確保されつつ同時に相互性が機能する。**
  8. この場合の相互性とは、**聖霊が固有な人間存在の中に入り込み、**
  9. 固有な人格と共に、
  10. また**固有な人格の固有の性質、固有の賜物が用いられつつ**
  11. **一体的に働くことを意味する。**
40. 固有な人格の側からいえば、**聖霊のご支配のもとにありつつ、**
1. **同時にその人格の被造的固有性が存分に機能する。**
  2. これは**聖霊の独特の働き方**である。

3. 聖書の霊感論における**有機的靈感**は神学的には当然の帰結である。
  4. キリストは神であるが、聖霊の働きの果実であるキリスト者も教会も”**神的**”とはいえても、“神”とはいえない。
  5. 聖書も”**神的**”とはいえても、“神”とはいえない
  6. 聖霊論においては、**被造的実在性**は十全に位置づけられるし、位置づけられねばならない
41. 聖霊の注ぎを受けて救われるのは**いぜんとして”わたし”**なのである。
1. この意味において、**聖霊論における仮現論は断固拒否**されなければならない。
  2. 聖霊論の枠組みの中にある聖書論においてはあらゆる意味において**仮現論思考**は排除されなければならない。
  3. このような聖霊論的視点からみるとき、「聖書のしもべ形態」は、
  4. キリストのしもべ形態の視点よりも、
  5. **聖霊のしもべ形態の視点**から把握するほうがはるかに適切である。
  6. 聖霊論的視点からいえば、**聖霊は、被造的現実性の中で、**
  7. **それと共に働き、あえて大胆な言い方をすれば、被造的現実性の運命と一体化して働く**
  8. そこに、「**聖霊のしもべ形態**」が存在する。
    1. 聖書著者の文学的、言語学的弱さ、
    2. 人間の喜怒哀楽などの感情的特性と弱点
    3. 地理的、歴史的知識の限界性さえも含み込む
42. 預言者の問題は、砂鉄を熱して、赤々とした鉄の塊が叩かれ、練られ、延ばされ、刀へと仕上げられていく「**刀匠と刀**」の**関係とそのプロセス**と似ている。
1. そのような意味で、わたしは恍惚的な状態で預言を語る、未熟な信仰者や、神学的素養の薄い、偏見に満ちた発言をする「**自称預言者**」を信じない。彼らは、刀のかたちをしているが、実は「**竹光**」にすぎない。本物の刀を本当に切れる刀である。
  2. わたしには、ローザンヌ誓約をまとめた**J.R.W. ストット**のような**説教者**や、今回参考になっている**ラッド、宇田進、エリクソン、牧田吉和等の神学者**の方が、**真に神の言葉を預かって、まっすぐに説き明かしている「預言者」**のようにみえるのである。これらの先生方からは、**使徒的聖書解釈**からはずれたものを見出すことはできないように思うのである。
43. わたしは、現在、キリストのしもべ形態、聖書のしもべ形態の類比から、聖書論を聖霊論の視点からとらえなおし、「**聖霊のしもべ形態**」において**聖書論を考**えることの大切さを教えられているところである。レストレーション運動等をも念頭にさらに学びを深めていきたい。(未完原稿)